平成２６年１０月２３日(木)

老球の細道７４号

# 『４回バスケットボールアスリート教室雑感』

会津バスケットボール協会理事長　　室　井　冨　仁

幕末の頃、河井継之助が率いた北越戦争（戊辰戦争）で敗れた長岡藩は、７万４０００石から２万４０００石に減らされ、財政が窮乏し、藩士たちはその日の食にも苦慮する状態だった。 窮状を見かねた長岡藩の支藩三根山藩から百俵の米が贈られることとなった。

藩士たちは、これで生活が少しでも楽になると喜んだが、藩の大参事小林虎三郎は、贈られた米を藩士に分け与えず、売却の上で学校設立の費用とすることを決定した。藩士たちはこの通達に驚き反発して虎三郎のもとへ押しかけて抗議するが、それに対して虎三郎は次のように諭して、政策を押し切ったという。

「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」

世にいう「米百俵」の逸話である。この話は後に「米百俵の精神」となり、元内閣総理大臣だった小泉純一郎が所信表明演説で使い、２００１年の流行語となって有名になった。この逸話は、現在の辛抱が将来利益となることを象徴するとして引用されている。

１０月１９日（日）第４回アスリート教室が会津高校で実施された。アスリート教室も米百俵の理念と同じく、将来においてバスケットボールのみならず社会において花開く人材の育成を目指して行われている。だから練習する内容は基礎基本ばかり。小、中学生の育成年代だからゲームを中心に伸び伸び楽しくやれればいいという考えはない。

アスリート教室ではスキル的なものだけではなく、メンタル面の指導にも力を入れている。「心・技・体」と並ぶようにメンタルが最重要基礎基本だから。コーチの神様ジョン・ウッデン（元ＵＣＬＡヘッドコーチ）は自らのコーチ哲学「成功のピラミッド」の中で、「勤勉（努力）」と「情熱」をピラミッドの土台となる礎石としている。価値あるものはすべて努力によって生まれる。成功する人は皆努力家である。情熱は単調な仕事に火をつけ、それを勤勉（努力）に変える。このようなメンタルの土台にスキルの基礎が乗る。

今回のアスリート教室のテーマは「ドリブルチェンンジ」と「ピボット」だった。どちらもシュート練習がなく、子どもたちにとってはつまらないものだったかもしれない。しかし、何事も米百俵の教訓である。ドリブルチェンジは後に、ドリブルでデイフェンスを抜いていくすべてのスキルにつながっていく。ピボットも同じ。ボールを守るだけではなく、1:1でデイフェンスを抜き去るフェイントやジャブステップにつながっていく。

１０月に入ってｂｊリーグ福島ファイヤーボンズのゲームを３試合観戦した。まじかで見る黒人選手の圧倒的なパワーに「マジかよ！」などと若者に迎合した言葉を発してしまいそうになった。この選手たちでもアメリカでは一流の選手たちではない。日本人との身体能力のレベルにどれだけ差があるのか、絶句！

身体能力で太刀打ちできない日本のバスケットボールは、改めて基礎基本の徹底で勝負をしなければならないことを痛感させられた。草の根レベルの会津地区の育成年代（小、中学校）の子どもたちも同様である。

基本に中途半端はない、基本にアバウトはない、基本に不徹底はない、基本に例外はない。土台が確固たるものでなければ、高みには登れない。いくら積み上げても砂上の楼閣となって崩れ去るのは時間の問題となる。